

【祈りの言葉に対するコメント】

メールの内容の発信責任者および発信協力者が、奈良先生以外はNPO 法人武士道協会のメンバーであることです。そして震災の被災者の助け合いの精神、自衛隊や消防隊員の犠牲的精神を、大和心&武士道によるものと、かなり強引な我田引水の解釈をしていることです。場合によってはこれはかなり危険なことではないかと思えます。私は武士道なるものをわかっているとはとても言えません。映画や芝居のイメージや「葉隠れ」などの引用しか知りませんが、日本人一般の理解はやはりそんなところではないかと思えます。ですから敢えてそれを基準にして考えれば、なんだかおかしい。

武士とは何か、昨年国立歴史博物館でそれをテーマに展示をしていて、われわれがテレビなどから一般的に思い浮かべる江戸時代の武士はごく一部にしか過ぎないことを説明していましたが、やはり武士の存在理由は戦って敵を倒すことでしかなく、その精神性うんぬんは後からくっつけられたもの。その「精神性」が先の大戦でどのように利用されたか、忘れてはならないと思えます。ですからこれをそのまま訳して世界に発信するのは、誤解される懸念もあるかと思えます。

返 信

NPO 法人武士道協会
常務理事 本多百代

大和心・武士道

武士道と武士・武道と混同される方が大変多ございますが、武士は武士、武道は武道であって、武士道とは違う意味合いのものであり、同じものではありません。しかし、私が講演を依頼されて現場に行きますと、『女』『袴を着ていない』『戦い、武士、など硬い話だと思っていた』という言葉は必ずと言ってよいほど聞きます。イメージとはそういうものだと思います。また、武士のいないところに武士道は成り立たないと言う方もいらっしゃいますし、武士道は右翼の特権の様に言う方もいらっしゃいます。しかし、武士道を言い換えると道徳心、公德心、惻隱の情などがその内容から適合する言葉です。

世の中に存在するものには、陰陽の二面が必ずと言っていいほど存在していると思えます。私たち人間も馬が合うとか合わないという言葉があるように、ある人にとっては素晴らしい面に映っても、別の人からは耐えられない不快な面に映ることがあります。親切とお節介の境目はそこにあるのではないのでしょうか。それと同じく特に忌み嫌われる存在にはその二面性の差が著しいようです。例えば、原子力・自衛隊・武士道(宗教・道徳)が戦後の日本では3大排除対象になっているように思えます。

原子力は今現在福島原発で、世界中が恐怖で震撼する事態が発生しております。しかし、計画停電などで原子力のありがたみも充分わかりました。自衛隊に対しては、ある政治家が暴力装置と発言したことで、いかに目の敵にしていたか分かります。しかし、東日本大震災で被災した方々を救い、遺体を探し、そして危険を顧みず福島第一原発の現場で様々な活動をしてくださっているのは自衛隊です。最近になって、暴力装置という発言は適切な発言ではなかったと同じ政党の幹部

の方が訂正を入れました。そして、大和心・武士道(道德心)については、なかなか学校教育の中に組み込まれないのが現状で、すぐに宗教と言われて忌み嫌われ、目に見えない心の世界の事を表だって話すこともままならない状態です。しかし、いつの世でも、本当に強い者は『逞しく』『潔く』『清い心』を持って生きているからこそ、大切な命を懸けて仕事に従事できるのではないのでしょうか。この強い心を育むのが武士道精神(道德教育)であり、欧米では宗教教育がなしているのです。それは新渡戸稲造の武士道でも明らかです。

武士は切腹をするから命を粗末に扱っていたと思われがちです。ところが私たちは、失敗をされ被害を受けた時に、責任者が要らない物を差し出して「これで責任を果たした」と言って、果たして納得するのでしょうか。引責辞任をすることで責任を果たしたと認められるのは、名誉があり高収入の立場である人がそれを投げ出すからこそ、被害を受けた者は納得することができるのです。つまり、その人にとって一番大切な命を差し出すことで責任を果たしていたと取る方が筋が通っています。そうすると武士はそれだけ真剣に命を扱っていたという見方が出来ます。一般的に広まっている捉え方とは逆の視点です。

先ほども申し上げましたが、世の中は全て陰陽でバランスをとりながら存在しています。太陽と月、光と闇、戦争と平和、男と女、長所と短所、枚挙に暇がありません。だから、相反するものを否定しているだけでは和が保てず、反って戦争を引き起こします。宗教戦争がその例でしょう。

ここで先ほどの自衛隊の話に戻しまして、武士道を武士と重ねて見たとしましょう。武士は今の世で言うならば軍隊であり軍人です。確かに戦国時代は戦士として戦うことに命を懸けたでしょうが、熊谷直実は戦の最中にも敵の若者を思い、そっと逃そうとするなど、戦をするのが敵を倒すことだけを目的としていたとは言えないでしょう。現代は地球規模で国と国が戦争をしていますが、江戸時代になるまでは日本という国の中にいくつもの小さな国が有って、日本の統一を図って戦っていたように思います。今はそれが地球規模で行われているのです。

また、江戸時代になると武士は市民を守るための役割をするようになり、現代の自衛隊・機動隊・警察官と似たり寄ったりであったことは間違いのないようです。辞書でも武士は軍事にたずさわった身分の者とあります。その視点から見ると武士道は自衛隊や警察官の生き方とも言えます。

武士も自衛隊も決して戦うだけの存在ではありません。市民の安全のために尽力したり、被災した地域の復興に向けてどれだけ多くの力を貸して下さっているか計り知れません。今の日本に自衛隊が無かったら、震災で亡くなった方々の遺体があれだけ見つけることが出来たでしょうか。アメリカの軍隊が来てくれなかったら、これだけ早く復興に向けて歩み始められたでしょうか。震災後の仙台空港に旅客機が離着陸するのを見た時、その復興の速さが自衛隊の尽力の大きさを物語っていました。被災地の空港で出迎えた方の涙が、その気持ちを表しているのではないのでしょうか。

自衛隊、武士道や宗教などの精神論、原子力、それらそのものが悪いのではなく、それをいつどの様に扱うかの判断が重要であり、それを指示する責任者たるリーダーの人間性・資質・知識などが最も問われるべきことではないのでしょうか。もっと言うならば、リーダーを問う前にそれなりの人材を育成する仕組みが出来ているかどうかを問うべきでしょう。

その様に考えた時、そのバランスのとり方が大切で、偏らない視点が必要ですし、助けられている部分には素直に感謝をすることも必要です。それが、今は反対運動が盛んで、その中に感謝が全く取り入れられていないのが片手落ちと感じます。武士道というと所謂左寄りと世間では表現され

ている方々から「戦争論者」と言われ、平和というと同じく右寄りと表現されている方々から「腰抜け、腑抜け、成り下がり者」といった侮蔑の言葉を浴びせられます。武士道や平和という言葉が悪い言葉ではないのに、なぜこのようなことになるのか、冷静に考えたらおかしなことです。

武士道を学ぶことで責任感が強くなり、逞しく謙虚になっても戦争を引き起こすことはあり得ません。平和を願うのは腰抜けでも腑抜けでもなく、世界中の万民が願っている至極当然のことです。いつの時代でも平和を願う気持ちは万国共通です。戦争は自分(自国)だけが良くなりたいたいという我欲が為せるところの諍いで、他者を思い、他者の不幸を自分の不幸と考えたなら、決して戦争など起こすには至らないでしょう。

世間では、原子力、自衛隊、武士道、などは一点のイメージから判断しているように思います。中身を正しく分析して認識をした場合、否定するだけではなく、感謝もした上で今の人間に必要なか不必要かを冷静に考える必要があるのではないのでしょうか。例えば、武士道の必要性を考えた時、自殺者年間3万人の日本、モンスターと呼ばれる親たち、引きこもり、ニート、が社会問題にまできていることにも視点を向けるべきではないかと思えます。何とか苦しんでいる方々が幸せと思える社会にするためには、どうしたら良いのでしょうか。社会は人間が集まってできているわけですから、その人間各自が自分も周囲も肯定し、認め、生きる事を楽しむ生き方を身につける必要があることは間違いありません。

また、原子力と言えば、『祈りの言葉』にも書きましたが、人間が作ったものであるのに消すことができないのは「その物の能力」より「人間の能力」の方が劣っているということなのです。ということは、人間が扱うにはまだ知識や能力が不足していることから時期尚早であると考えべきです。己の利益のみを追求すると、たとえ地球に悪いことでもやめられなくなります。その時に私より公を重んじる精神が育っていれば、地球に良くないことはやめようという勇気がわくでしょう。とは申せ、原子力のお蔭で我々は便利で安心な夜道も与えて頂いております。原子力関係で働いている方々も、我々に便利さを与えてくださろうと危険といわれる中で、一生懸命働いてくださっています。そして、この度も逃げずに放射能の強い現場に残り、被曝を覚悟で働いて下さっています。このことには素直に感謝をし、我々にできることを少しでもさせて頂こうという思いで「祈りの言葉」を毎日挙げるのが、次の一步を踏み出すきっかけを作るのではないのでしょうか。

自衛隊に関しては、いつも困った時には出勤して頂き、庶民が出来ないことを率先してなさせて頂いていることに、先ず心から感謝をすべきであります。そして、我々庶民が自衛隊を戦争に行かせることがないような社会を確立させることが必要です。自衛隊員は戦争が好きで自衛隊員に志願したわけではありません。自衛隊員は祖国日本を愛し、日本国民を大切に思うからこそ、命を懸けて母国を守ろうと思ひ志願しています。戦争が好きで戦って敵を倒すことに喜びを感じて自衛隊員になったのではないことをどうか理解すると同時に、どうか感謝をして頂きたいと思ひます。戦争のない世界をつくるためには、人間全員が利他の精神を育て、分かち合うことの喜びを知ることが必要で、しかもそれは地球規模で行う必要があります。その時に力を発揮するのが大和心・武士道であると自負しております。戦争を仕掛けられないようにするには、先ず日本人が世界の人にとって必要不可欠な母なる存在となることです。母なる存在とは、与える事の喜びと育てる事の喜びを知っていて、実行できている事であり、この度の震災で東北の被災者の方々が見せた我慢強さと分かち合う優しさを誰もが持つことでしょう。大震災の後に暴動が起きない、略奪が起きない、これは

世界で珍しいことだそうです。それが当たり前になっている我々日本人も、自国の素晴らしさを改めて見直す必要があると自信を持って申し上げます。

人間は物欲や娯楽を満足させただけでは悲しいかな普通の幸せを感じることは出来ないのです。不思議と他者の為に自分が役に立っているという自己重要感に満たされた時に初めて幸せは持続していきます。自己重要感に満たされるには、その前に認めてもらいたいという承認欲求(他者に認めてもらいたい)があり、マズローの五段階欲求説の第四段目の欲求です。自己重要感の欲求(他者に役に立っていると自覚できる)のが最高段の欲求になります。最高段の欲求を満たすには、謙虚さと素直さが必要であり、金銭至上主義の社会で育ってはなかなか得られないのです。だから、この自殺者年間三万人、ニート、鬱、引きこもり、すぐ切れるなどという現状があるのではないのでしょうか。

視点はいくつもあった方がよろしいので、また別の視点から武士道を説明してみます。武士道の『武』は「矛を止める(収める)」と書きます。矛とは武器の事です。出した武器も収めて丸く収めると意識できます。丸く収めるとは和をもって尊しとなすわけです。『士』は公認会計士や弁護士に使われるように「その道を極めた人」「並みの人ではちょっとできないようなことをやってのける人」のことを言います。『道』は「生き方」「人として踏み行ふべきみち」のことです。よって文字から理解すると、『どのような場合でも矛をおさめて和を保つ方法を極めた生き方』と解釈できます。

武士道というネーミングは、戦後にある種のイメージを植え付けられたところもなきしも非ずと存じます。それならば、大和民族の末裔として、私たちの先祖が素晴らしい意識を持ち、世界各国からも賞賛される生き方が武士道であると新渡戸稲造が公表したのですから、それを尊び、今の時代にふさわしい大和心・武士道論を掲げようと思っています。

もちろん、名前などどうでもよいから、人としての道を外すような行いをなくしていきたいと思ったのが始まりでした。日本文化精神、日本伝統精神、大和心、大和魂、沢山の名前が拳がりました。しかし、最終的には神道・儒教・仏教の教えが基礎にあり、他者の気持ちを重んじ、配慮をしていることを悟らせない気遣いが最も尊い気配りであること日々の生活の中で教わって来たことでもあります。そして、新渡戸稲造著の「武士道」には、“武士道は道徳的原理の掟である”と書かれていることから、武士道協会という名称に決まりました。

そこで、『武士道』(新渡戸稲造著・矢内原忠雄訳)より以下の部分を抜粋させていただきます。

.....

【第一章 P27】それは成文法ではなく、口伝により、もしくは数人の有名なる武士もしくは学者の筆によって伝えられたる僅かの格言があるに過ぎない。むしろそれは語られず書かれざる掟、心の肉碑に録されたる律法たることが多い。不言不文であるだけ、実行によって一層力強く効力を認められているのである。中略 道徳史上における武士道の地位は、おそらく政治史上におけるイギリス憲法の地位と同じであろう、しかも武士道には、大憲章もしくは人身逮捕令に比較すべきものさえないのである。

【第2章 P32】まず仏教から始めよう。運命に任ずという平静なる感覚。不可避に対する静かなる服従、危険災禍に直面してのストイック的な沈着、生を賤しみ死を親しむ心、仏教は武士道に対してこれらを寄与した。 中略 仏教の与え得ざりしものを、神道が豊かに供給した。神道の教義によりて刻み込まれたる主君に対する忠誠、祖先に対する尊敬、並びに親に対する孝行は、他のいかなる宗教によっても教えられなかったほどのものであって、これによって武士の傲慢なる性格に服従性が賦与された。神道の進学には「原罪」の教義がない。かえって反対に、人の心の本来善にして神のごとく清浄なることを信じ、神託の宣べらるべき至聖所としてこれを崇め貴ぶ。

【P34】厳密なる意味においての道徳的教義に関しては、孔子の教訓は武士道の最も豊富な淵源であった。君臣、父子、長幼、ならびに朋友間における五倫の道は、経書が中国から輸入される以前からわが民族的本能の認めていたところであって、孔子の教えはこれを確認したに過ぎない。政治道徳に関する彼の教訓の性質は、平静仁徳にしてかつ処世の智慧に富み、治者階級たるには特に善く適合した。

【第6章 P62】

日本在住二十年の婦人宣教師がかつて私に語りし言によれば、「おそらくおかしく」見えるものである。その人はすぐに帽子をとる よろしい、それは極めて自然である。しかし彼が対談中自分の日傘を下して炎天に立ち通すということは、「おそらくおかしい」仕草である。何を馬鹿気た！ しかり、もし彼の動機が、「君は陽にさらされている。私は君に同情する。もし私の日傘が十分大きければ、もしくは我々が親友の間柄であるならば、私は喜んで君を私の日傘の下に入れてあげたい。しかし私は君を蔽うことができないから、せめて君の苦痛を分かつてであろう」と言うにあるのでなければ、それは本当におかしい事だろう。これと等しく、或いはもっとおかしい小さい行為がすくなくないが、それらも単なる身振りもしくは習慣ではなく、他人の愉快を慮る思慮深き感情の「体現」である。

我が国礼法によって定められている習慣の中「おそろしくおかしい」例を、も一つ挙げよう。日本についての多くの皮相なる著者は、これをば日本国民に一般的なる何でも倒さまの習性に帰して、簡単に片付けている。この慣習に接したる外国人は誰でも、その場合適当なる返答をなすに当惑を感じずることを告白するであろう。他にもない、アメリカで贈物をする時には、受け取る人に向かって品物を誉めそやすが、日本ではこれを軽んじ賤しめる。アメリカ人の底意はこうである、「これは善い贈物です。善いものでなければ、私はあえてこれを君に贈りません。善き物以外の物を君に贈るのは侮辱ですから」。これに反し日本人の論理はこうである。「君は善い方です、いかなる善き物も君には適わしくありません。君の足下にいかなる物を置いても、私の好意の記しとして以外にはそれを受取たまわないでしょう。この品物をば物自身の価値の故にでなく、記として受取ってください。最善の贈物でも、それをば君に適わしきほどに善いと呼ぶことは、君の価値に対する侮辱であります」。この二つの思想を対照すれば、究極の思想は同一である。どしらも「おそろしくおかしい」ものではない。アメリカ人は贈物の物質について言い、日本人贈物を差し出す精神について言うのである。

.....

この様に、武士道には神道儒教仏教の教えがちりばめられており、日本人の精神的土壌に開花結実した道徳心であり行為であると書かれています。しかし、武士だけでなく、お百姓さんにも商人にも日本人であれば誰にでも「人の困ることをしない」「人に迷惑をかけない」「みんなで助け合う」という武士道精神が備わっていたのではないのでしょうか。それ故に、明治維新の頃に日本を訪れた外人たちが、こぞって驚嘆したのが、平民に至る迄の識字率の高さと礼儀正しさであったのでしょ。そして、それは時代が変わっても必要とされ、求められる生き方であると言うでしょう。

つまり、大和心・武士道とは日本人の生き方・精神のことを言っています。例え戦士(武士)の心の在り方を指したとしても、それは戦場で戦う戦士(武士)の闘争心を指しているのではなく、その様な過酷な場に置かれる人々が如何に平常心でいることができるか、つまり心の安定と平和を保つために必要なものと言った方が適切でしょう。

新渡戸稲造は敬虔なクリスチャンでした。新渡戸武士道は仁義礼智信という文字で外人向けに英語で日本人の道徳心を詳しく説明したものです。最近では同じく敬虔なクリスチャンである台湾の李登輝元総統が武士道解題として新渡戸武士道に詳しく説明を加えています。また、山本常朝の葉隠も我欲を捨てて他者の為に自分を生かすことの大切さを説いています。武士とは「死ぬことと見つけたり」という有名な文言は、武士が命を軽んじて死ぬことを良い事としているわけではないのです。「(命を惜しんで)及び腰で物事にあたって、良いお勤めができない。(死を覚悟して)無心で臨んでこそ本懐を遂げ、誰もが満足のいく結果を得ることが出来る」ということを言っているのです。

日本には神道、仏教、儒教、キリスト教とすべてが日本式に変化をして取り込まれています。本来のインドの原始仏教(テラワダ)と日本の仏教(大乘)では、かなり形も戒律も違っています。キリスト教では離婚が許されていませんので、イタリアなどではそれが守られています。日本ではキリスト教結婚式をしてもすぐに離婚しています。否定せず肯定し認めた上で日本という風土に順応させて和を保ち上手に取り入れています。この和を持って順応させるところが、第二次世界大戦後の在り方や発展にも表れていますし、江戸無血開城を成し遂げた明治維新にも表れていると言えるでしょう。

武士道であれば宗教宗派、政治党派に関与また支配されずに道徳心を説けます。武士道とは人としてのあるべき姿を言葉にしたものと言ってよいのではないのでしょうか。キリスト教信者が素晴らしいことをして、イスラム教信者に真似てくださいといっても、そのまま受け入れられるかどうかは疑問ですし、また反対も然りです。しかし、どの宗教を信仰していてもお構いなく、各宗教に共通の心のマナーとしての武士道があるとなれば、誰もが受け入れやすく世界共通の道徳心を育てることが可能となります。その武士道を学び身につければ、世界中で心の和を保ち、助け合いの輪が広がり、それが平和へ寄与することになっていくことでしょう。

名前から受けるイメージはちょっと横においておき、私が武士道を広めたいと思い立った経緯は、ある30代後半の男性が「日本なんてアメリカの53番目の州にしてもらえればいいんだ」と発言したところからです。「それは植民地のこと。何のために祖先が努力してきたのか」と申し上げたところ「ハワイだってグアムだって、前より良くなっている」と言ったのです。経済的な一面しか見ないこの考え方に危機を感じました。その国の文化、そして、それまでの積み重ねなどを考えず

に一点つまり経済面のみで全体を決めてしまうことに憂いを感じたのです。一点からだけ物を見ていたのでは片手落ちで正しい判断が出来ず、それはとても怖いことなのです。

我々は流れの中で生きています。川が流れるように時が流れています。川はいつも同じところに流れ同じように見えますが、水はいつも変わり同じときは一時としてありません。人間が年を取るように、全てが変化をしながら成長しています。言語をとってみても、同じ日本語でありながら平安時代・江戸時代・現代とでは全く違った言葉を使って話します。また、同じ時代であっても方言があり地方によってかなり単語に違いがあります。つまり、武士道と言っても時代が変わればその時代に合うように変化してもおかしくないわけですし、また、変わらないものなどこの世に存在しないのですから、改めて内容を様々な視点から考慮する必要があると言えるのではないのでしょうか。

ソニーも創設者が現役の時代は、摩訶不思議を追及して研究するセクションがあったそうです。その一つに、岩にも命があり変化をしているが、岩の命は何億年という長さなので、たかだか80有余年の人間には岩に変化があることが分からないから命が無いように思えるだけであるという結果を導いた研究者がいたそうです。その方がパソコンのバイオの名づけ親だそうです。考えてみれば確かに、たった一週間の命しかない蟬から人間を見ても赤ちゃんから老人にまで変化をすることはよもや知る由もないわけで、蟬には人間が全く変化をしない生き物のように見える事でしょう。岩に命が有るのなら、原子力発電のような先端科学装置であっても、元は地球の体の一部から作ったのですから、命や意識があってもおかしくないという見方もできます。

私たち人間が生きていけるのも、地球という生命体が存在しているからで、私たちの体の中の細胞が生きていけるのも私たち人間という生命体が存在しているからです。人間は自分の意思で自分の力で生きていていると思っているけれど、地球に存在する他の命を頂いて生かされています。植物は地球の大地から直接栄養を頂き、太陽の光を栄養に変えることができるから、動物たちに食べて頂くことで、責任を果たし喜んでいのではないかと思うのです。このように考えると自然と謙虚になれ、また素直に感謝ができます。牛が無残に目の前で殺されるのを見たならば、誰もが可哀相だと思ひ涙する人も出る事でしょう。しかし、そこで涙した人が焼肉屋に入っても同じように涙するのでしょうか。もしかしたら「いただきます」という言葉すらかけずにお箸をつけることも無きにしも非ずでしょう。人間は目に見える事だけを認めるといふ癖がついている間は、この様に良く考えるとおかしいことを平気でしている状態なのです。

目に見えない物であっても、また、命がないと決め込んでいる事であっても、もしかしたら・・・という目も持ち合わせる事が、正しい判断をしていく基本であると自然が教えているように感じてなりません。武士道の過去は勇ましさなどが全面に出ていたのかもしれませんが。新渡戸武士道、李登輝元総統の武士道解題と武士道が分かりやすく伝えられてきました。そして、今改めて現代武士道を立ち上げて思うことは、武士道は道徳心・公德心であり、心の強くするために有効な教えと言えるということです。

世の中の法律も、規則も、全て人間が作ったり決めたりしたものです。正誤の判断もその土地、その気候、そこに住む人々が過ごしやすいように、安心して暮らせるようにということが基準で作られたものです。もしかすると困ったことが起きた結果、今後はその様な事が起きない様にと後手で作られた法律の方が多いかもしれません。法律などなくても誰もが公德心を持ち合わせ、私より

公を重んじたならば、世の中はもっと過ごしやすくなっていることでしょう。言い過ぎかもしれませんが、間違い以外の犯罪は起きなくなるのではないかと期待できます。

人間は過去の経験や得た知識から判断をします。人間は完璧でなんでもできる存在で生まれてきていますが、人間の脳細胞は一生の間にわずか5～6%しか使われず、残りの90～95%は眠ったままの状態が終わってしまうと言われていています。ということは残りの眠ったままの95%で判断する出来事に出くわしたとしたら、想像で一か八かの判断をするしかないとも言えましょう。そのような時でも判断ミスが最小限で済むようにするには、心に柱、つまり信念を持っていることが必要です。その信念を打ち立てるのに、道徳心である大和心・武士道はとてもありがたい存在といえるのではないのでしょうか。

ぜひ、視点を変えて大和心・武士道をご覧ください、きっと大切さを理解頂けると確信いたしております。どうかお願いいたします。